

初めて死にたくなっただけのことを思い出した

凍可宙夜いっかちゅうや

初めて死にたくなっただけのことを思い出した。

私はこれまでずっと、「私はどうして死にたくならないうらやう？」と不思議に思っていた。

「殺したい」「殺してやる」しかなかった。

人の「死にたい」が不思議だった。

そして、自分が最初にうつ状態になったのは、七歳のときだと思っていた。小学校からの帰り道に、広い交差点の横断歩道を渡りながら、「ああ、もう人生の楽しいことはやり尽くしちゃったんだな」と感じたのがその瞬間だと。「今後一生たのしくないんだ」と悟った、ような。その直感をスッと受け入れた、そのときが私のうつの始まりだと思っていた。

しかし、私が今回思い出したのは五歳の頃の記憶だ。

当時通っていた保育園の、二階の教室のベランダに放り出されて、鍵をかけられて閉じ込められた記憶だ。鍵はかかっていなかったのかもしれないが、そのとき私の力ではガラス戸は開けなかった。私がベランダで外から教室の中を見ている。窓ガラスを閉めて、教室から私を閉め出した保育士はこちらを見ている。分かっているが、無視している。そのうちに教室の中では工作が始まる。ひなまつりの飾りを作っているところだった、その日は前日までに作っていたものの続きを銘々作り、完成までさせているようだった。私のおひなさまは完成しなかった。その日、工作が大好きだった私は、おひなさまを完成させることをたのしみに行っていた。

そして、その保育士はそれを知っていた。私はそれをその保育士に話したのだ。おひなさまをつくりたい！ はやくはじめようよ、いまやりたい、出してきてやってほしい？

……あとでみんなで作るから、というようなことを言われて、そのあと私はベランダに出された。一人で。

初めて死にたくなっただけのことを思い出した

初めて死にたくなったときのことを思い出した

私はひどく心細かったのを覚えている。訴えても中へ入れてもらえなかった。いれて！と叫んだ記憶がある。こちらを見た、あの大人の目を覚えている。私はその日の帰り際に、完成しなかったおひなさまを保育士が私の母に手渡しながら、「私ちゃんがなかなかやらないから完成しなかったんですよ」と言っているのを聞いていた。あなたが私を締め出したのに、私の責任にするのか。激しい怒りだったように思う。とうに悲しみは終わっていた。そのときの心細さが私の初めての死にたさだった。二階のベランダに、一人で、放り出されて、私はそのとき死に方を知っていたらまっすぐ園庭に落下していたと思う。飛び降り自殺ということばを知らなかったただだ。しぬ、ということをしらなかつただだ。ほんとうに、ほんとうに、絶望した。私は虚しかった。無意味で、無効な、無の。私の訴えはそれが全て。私の訴えは無意味。そう感じるのには十分な虐待だった。

ただ単に、この状況では保育士の方が悪い。これだけはもうどうしようもないと思う。完全に保育士の加害行為だ。私はどんなにいうことをきかない都合の悪い子供だったとしても、こどもであるというだけで、大人に加害されてはいけなかつた。言葉を変えれば、その保育士はどれだけ気にくわなことやストレスがあつたとしても子供を使つてそれを発散してはいけなかつた。

自分より弱い立場や肉体を持っているものに対して、支配して快楽を得たがる大人は、忍耐に欠けるものである。

大人として引き受けるべき責任を取れない大人である。

その大人は健全な判断基準にはならない。私はその大人の世界では生きていけない。

しかし、こどもが暮らす世界はひどくせまい。登場する大人は数えても両手の指の数を超えないし、彼らは互いに嘘をつきあうだけで私の味方にはならない。私は、その大人たちの世界では生きていけない。

なら、わたしはどこにいればいい？

私は、自分が五歳になった頃に見た夢を一つだけ覚えている。当時私が好きだったたべものはいちごだったので、その頃の私は、わたしはおおきくなつたらいちごになるんだ！しょうらいのゆめはいちごになることだ！と心の底から思っていた。まだ五から先の

初めて死にたくなったときのことを思い出した

数を数えられなかった私にとって、五歳はにんげんの大きくなる最大のところだった。だから、私は五歳になったらいちごになるのだと当たり前のように思っていた。だって四歳の私は、まだアンパンマンはアンパンが大好きだからアンパンになった人間だと思っていたし、ジャムおじさんはパン屋が大好きだからパン屋になった人間だと思っていたし、この世界はなんだかわからないけどそういうルールなんだ、と思っていたから。

だから、私は五歳になる頃に自分がいちごになる夢を見た。私は夢の中で、園庭のジャングルジムよりもずっと大きいいちごになっていた。私はツヤツヤの赤いからだがあうれしくて、みんなにじまんしようと思つて教室の中に走つていった。そして親友を掴み上げ、殺した。せんせいを掴み上げ、殺した。大きなからだの大きな口で手当り次第のにんげんを噛みちぎつて、目を覚まして、私は自分の体が赤くないことに安堵した。二枚重ねの毛布の中で息を殺して泣いた。これは夢だ。

みんな殺してやる、と考え出すようになったのは、時期的にはそのすぐ後だったと思う。みんな殺してやる。

とうに死にたさは終わっていた。

抱いていた怒りがことばを得て、心の中で形を持った。殺したい、殺してやる、しかし、殺してはいけない。

その日からだんだんと、わたしは世界からいなくなつていった。

だから私は、いま少しずつ、わたしが生きていける世界を探している。

いつかどこかにそれがある。いまもそれはどこかにある。それはきつとどこかにあつて、いつかはそこにたどりつく。私は少しずつ、わたしのいるばしょをみつめていきたい。